里親養育支援の実際とその支援が里親の里親養育支援についての満足度に与える影響

○ 福山市立大学 野口 啓示 (2736)

高橋順一 (同志社大学大学院・8413), 姜民護 (同志社大学・8570), 石田賀奈子 (立命館大学・6061)

伊藤嘉余子 (大阪府立大学・3930)

[キーワード] 里親養育支援, 因子分析, 重回帰分析

1. 研究目的

現在, 日本において社会的養護体制は変化のときを迎えている. 2002 年の児童福祉法改正以来, 里親制度の拡充が進められてきた. 2017 年の夏には, 「新しい社会的養育ビジョン」が発表され, 関係者に衝撃を与えることとなった. 里親委託推進は子どもの権利保障を考えると望ましいものである. しかし, 里親養育支援体制をしっかりと作り上げなければ, 里親委託が解除される等の事態が頻繁に起こることが予想され, 制度自体の維持が難しくなる. そこで, 本研究では, 効果的な里親養育支援体制の構築に資することをねらいに, 里親への養育支援の実態とその支援が里親の里親養育支援についての満足度に与える影響についての調査・分析を行った.

2. 方法

1) 調査対象

調査対象は, 実際に里子の養育を受託している全国の里親家庭 4,038 か所とし, 郵送法によるアンケート調査を実施した. 配布に関しては, 里親会支部 66 か所に各会員の里親家庭に調査票を発送していただいた. 調査期間は 2017 年 11 月 8 日～2018 年 1 月 10 日までの約 2 か月間であった.

2) アンケート用紙

里親への養育支援の状況, および里親の里親養育支援についての満足度を調査するアンケート用紙を作成し, 配付した. 里親への養育支援の状況については, 「里子が委託される前の里親への養育支援状況」と「里子が委託されてからの里親への養育支援状況」の二つを尋ねた. 「里子が委託される前の里親への養育支援状況」は 15 の質問項目, そして「里子が委託されてからの里親への支援状況」は 35 の質問項目を用意した. 「里親への支援状況についてお聞きします」と尋ね, 「全くなかった」を 1, 「あまりなかった」を 2, 「少しあった」を 3, 「十分あった」を 4 として回答を得た. 里親養育支援についての満足度は, 「全く満足していない」を 1, 「満足していない」を 2, 「満足している」を 3, 「とても満足している」を 4 として回答を得た.

3. 倫理的配慮

収集したデータについては統計的に処理を行い, 結果の公表に際して施設や個人が特定されることのないように十分配慮した. なお, 本調査については, 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科設置の倫理審査委員会の承認を得ている.

4. 研究結果

1) 回収率

1,726 家庭から回答を得た (回収率 42.7%). ただし, ファミリーホームだと考えられるデータや 20 歳以上の里子のみのお家のデータ等を除外した結果, 有効回答数は 1,214 (有効回答率 30.1%) となった.

2) 里子が委託される前の里親への養育支援状況の構成要素 探索的因子分析結果

里子が委託される前の里親への養育支援を構成する構成要素 (因子) を抽出するため, 探索的因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を実施した. 結果, 2 つの因子が抽出された. 因子を構成する項目から, 第 1 因子を「委託前支援」, 第 2 因子を「未委託里親への支援」とそれぞれ名づけた. 因子項目間の内的信頼性を検討するために α 係数を求めた結果, 第 1 因子が 0.94, 第 2 因子が 0.88 と内的信頼性は低くはなかった.

3) 里子が委託されてからの里親への養育支援状況の構成要素 探索的因子分析結果

里子が委託されてからの里親への養育支援を構成する構成要素 (因子) を抽出するため, 探索的

因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。どの因子にも 0.4 以下の因子負荷量しか示していない、もしくは複数の因子に 0.4 以上の因子負荷量を示した 10 項目を除き、再度因子分析を行い、因子構造を確定した。

結果、5つの因子が抽出された。因子を構成する項目から、第1因子を「里子のニーズと里親の意向を尊重した里親子支援」、第2因子を「里親研修」、第3因子を「里親養育をささえるつながりづくりの支援」、第4因子を「不調時の危機介入」、第5因子を「レスパイト」、とそれぞれ名づけた。因子項目間の内的信頼性を検討するために α 係数を求めた結果、0.70～0.92と内的信頼性は低くはなかった。

4) 重回帰分析

里親の里親養育支援についての満足度に対して、因子分析で得られた各因子の変数がどう影響しているかをみるために重回帰分析を行った。独立変数は探索的因子分析によって抽出された7因子の因子得点を用いた。また、従属変数は、里親の里親養育支援についての満足度とした。投入方法にはステップワイズ法を用いた。その結果、最終モデルの調整済み R^2 は0.591、F値は26.257、そして有意水準は0.01%未満で有意であり、里親の里親養育についての満足度と独立変数との関係を分析するのに役立つと判断した。また、いずれの独立変数においても $VIF < 10$ で多重共線性は問題ないと判断した。

今回の調査から里親の里親養育支援についての満足度には里親養育支援のうち、「里親養育をささえるつながりづくりの支援」「委託前支援」の順で貢献していた。そして、両方がプラスの解であった。また、ステップワイズ法で5因子は落ちてしまっていた。里親の里親支援についての満足度には、「里親養育をささえるつながりづくりの支援」と「委託前支援」のみが影響を与えており、落ちてしまった5因子は影響を与えないということであった。

5. 考察

本研究結果から、以下の点が示された。

里子が委託される前の里親への養育支援状況を探索的因子分析した結果、2つの因子（「委託前支援」「未委託里親への支援」）が抽出された。つぎに、里子が委託されてからの里親への養育支援状況を探索的因子分析した結果、5つの因子（「里子のニーズと里親の意向を尊重した里親子支援」「里親研修」「里親養育をささえるつながりづくりの支援」「不調時の危機介入」「レスパイト」）が抽出された。さらに、これらの因子から里親の里親養育支援についての満足度への影響を重回帰分析した結果、「里親養育をささえるつながりづくりの支援」「委託前支援」のみが満足度へ貢献していた。そして、残りの5つの因子は満足度へ貢献していない結果となった。

今回の結果では、「里親養育をささえるつながりづくりの支援」と「委託前支援」のみが満足度へ貢献していたのだが、この2つの因子は里親の日常生活を直接サポートする因子だと言うことができ、日常生活における直接的な支援の重要性が示唆された。実際、「全くなかった」を1点、そして「十分あった」を4点とする各因子の得点の平均値を見てみると、貢献していた2因子のみが「あった」の方が多いと考えられる3点以上の平均値になっていたのに対し、その他の5つの因子では、「なかった」の方が多い3点以下の平均値を示した。これらのことを考えると、「里親養育をささえるつながりづくりの支援」や「委託前支援」については、その体制が整ってきている反面、その他の支援の充実が今後の課題であると言える。

謝辞

本研究は平成29年度厚生労働省「子ども・子育て支援推進調査研究事業」課題番号14「里親家庭における養育実態と支援ニーズに関する調査研究事業」（代表：伊藤嘉余子）の成果の一部をまとめたものである。調査研究にご協力賜りました関係諸氏ならびに里親の皆様に深謝いたします。